

第三十一回新能くるす桜上演記念
妙見法楽連歌 世吉 一卷

令和元年八月七日

賦何人連歌

〈初折表〉

みじか夜のたふとき舞はくるすかな 純一
 館新たに山里の夏 敏明
 呼子鳥鳴き交ふ森へ尋ね来て 泉
 梢の雲に緑立ちたる 敦子
 おぼろ月有明空に仰ぐらん 裕雄
 浦波ばかりのこるみなと江 一希
 船かげのしづかな海にうつるとき 瑞希
 香もなつかしきふるさとの文 加緒莉

〈初折裏〉

かもしかの声聞こえくる朝まだき 千恵
 離れがたくも凍て蝶のゐて 多美子
 旅先で二人して愛づ冬の薔薇 真奈美
 親に逆らふ走り夫婦 好博
 わかれ道こころときめき振り返り 愛子
 名残を惜しみあすを見つめる 桂子
 やほとせ 八百年の杉葉をなでて風わたる 恵美
 秋立てる日の明建の杜 春美
 望の月こだまするもの鐘の音 瑞希
 雁のたよりは法求むるか 敦子
 ままならぬ我が身を憂ひ旅行かむ 純一
 おぼろなりけり美濃の嶺みね 千恵
 しなる枝の白花房に夜もあけて 一希
 霞のひまに浮かぶ釣舟 加緒莉

〈名残折表〉

ささがにの巢のごと網を投げ入るる 真奈美
 頼みはかなくめぐみあだなり 敦子
 国境越ゆるも話まとまらず 裕雄
 深雪隔つる里ぞさびしき 純一
 睦言にゆかし恥ずかしいろり端 愛子
 マフラー直す細き君が手 桂子
 ほろ酔ひでタクシーを待つ二人連れ 好博
 思ふ玉章仕舞ひ置かばや 泉
 夜も更けて静けさに聴く虫の声 恭子
 手水鉢にも揺るる三日月 恵美
 岩陰の苔さへ露の跡見えて 一希
 風船かづら茂る細道 千恵
 ながむればかたみの雲は消え果てつ 敦子
 歌を休みて猪穴を見む 裕雄

〈名残折裏〉

黄昏れに吾子の手を取る影法師 桂子
 古き館の庭をめぐりて 好博
 山ざとは出づればすべて珍しく 一希
 都大路は木枯の中 純一
 人たゆる天に満ちたる星凍え 加緒莉
 とけつこほりつ池の薄氷 敦子
 雨催ふ花の下道なほのどか 泉
 谷から谷へわたる囀り 春美
 栗田純一(世田谷区) 四 渡邊多美子(郡上市) 一
 日置敏明(郡上市) 一 本田真奈美(郡上市) 二
 木島 泉(郡上市) 三 佐藤好博(美濃市) 三
 大村敦子(京都市) 五 三浦愛子(郡上市) 二
 鶴崎裕雄(大阪狭山市) 三 戸崎桂子(郡上市) 三
 竹島一希(奈良市) 四 松原恵美(郡上市) 二
 竹島瑞希(奈良市) 二 清水春美(郡上市) 二
 押川加緒莉(神戸市) 三 亀崎恭子(郡上市) 一
 渡邊千恵(郡上市) 三